



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	坪井玄道の米国体育視察（1902年5月～6月）：わが国近代体育の更なるアイデアを求める旅
Author(s)	大櫃, 敬史; OBITSU, Takashi
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 82, 183-197
Issue Date	2000-12
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.82.183
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28820
Type	departmental bulletin paper
File Information	82_P183-197.pdf



坪井玄道の米国体育視察（1902年5月～6月）

—わが国近代体育の更なるアイデアを求める旅—

大 櫃 敬 史

Gendo Tsuboi : A study tour of seeking new ideas for later Physical Culture (May~June, 1902.)

Takashi OBITSU

目 次

I. はじめに	183
II. 坪井玄道の米国訪問	184
1. 訪米の目的	186
2. 訪問日程及び場所	187
III. ボストンのジャーナルに掲載された「坪井玄道」	188
1. 坪井玄道教授の紹介	189
2. 日本におけるアマースト方式導入の経緯	191
3. 日本体育の現状について	192
1) 体育に対する基本的な考え方及び姿勢	192
2) 日本女性に関心のあるもの	192
3) 日米女性の相違（体育，習慣，衣服，寿命）	193
IV. 留学報告—日本近代体育の更なるアイデアを求める旅の総括	193
V. おわりに	194

I. はじめに

文部省の教育近代化に伴う体操振興の方針にそって、明治11年（1878）わが国に適した体操法の研究選定と、体育教員の養成を図る目的で体操伝習所が開設された。明治政府は、そこでの指導者として米国からリーランドを招き直接その任に当たらせた。明治14年（1881）、3年の任期を終えリーランドが帰国するや坪井玄道が同所の主任教師となり、リーランドが伝えた普通体操の普及に務めた。

今回取り上げるのはその中でも、坪井が高等師範学校及び女子高等師範学校教授であった明治33年6月、文部省は彼に体操研究を目的として向こう一年間の欧州留学を命じている。（「体操研究ノ為満一年間仏独英三ヶ国へ留学ヲ命ス 但シ米国ヲ経テ帰朝スベシ 明治33年6月12日 文部大臣 樺山資紀」¹⁾その際特に興味深いのは最後に米国経由で帰国することの一行を付け加えていたことである。

これまで坪井に関するこの時期の研究は、回想などを元に論述されることが多く、彼の言動を巡って直接現地に残された史料に即して検討されることはほとんど見られなかった。

本研究では、当時坪井が帰国の際に米国に立ち寄るのは如何なる意義が存在したのか、実際にどのような場所を訪れ、どんな人物と出会ったのか、また彼を待ち受けたボストンでの反響はどのようなものであったのか等について、1995年に行った米国史料調査の際に、新たに発見された当時の現地ボストンのジャーナリズムに掲載された記事や日本国内に所蔵されている坪井玄道関係史料を主要な手がかりにしなが、可能な限り解明していく。

最後に、この度の米国体育視察の成果について、考察する。

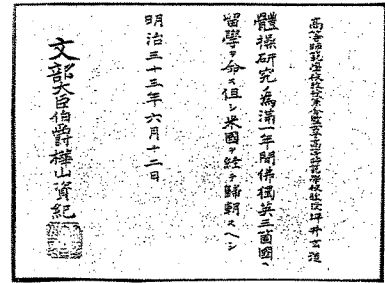


図1 辞令

表1 坪井玄道略年譜

明治5年(1872)7月	文部省から新設の師範学校(後の高等師範学校)勤務を命じられ、アメリカ人教師スコットの通訳を勤める。
明治8年(1875)6月	官立宮城英語学校の教師として仙台に転任。
明治11年(1878)10月	体操伝習所の開設とともに、東京に戻りアメリカ人体操教師リーランドの通訳を勤める。
明治14年(1881)7月	リーランド帰国後、後を継ぎ体操教師の養成にあたる。
明治15年(1882)6月	『新選体操書』を体操伝習所から刊行。
明治17年(1884)6月	『小学普通体操法』上・下巻を田中盛業との共編で刊行。
明治18年(1885)4月	田中盛業との共編で、『戸外遊戯法一名戸外運動法』を刊行。
明治19年(1886)4月	体操伝習所が廃止となり、高等師範学校の助教諭となる。
明治20年(1887)7月	田中盛業との共編で、『普通体操法』を刊行。
明治23年(1890)10月	高等師範学校兼女子師範学校教授となる。
明治33年(1900)6月	文部省から体操研究を目的として、一年間のフランス・ドイツ・イギリス三か国への留学を命じられる。
明治34年(1901)2月	欧州留学へ出発。留学生に芳賀矢一、滝簾太郎がいた。
明治35年(1902)6月	アメリカ経由で帰国。イギリスからピンポン用具を持ち帰り、初めて紹介する。
明治36年(1903)6月	抄訳『女子運動法』を可児徳と共に刊行。
明治37年(1904)10月	文部省の体操遊戯取調委員となる。明治38年~44年にかけて、『体操発達史』を初めとして著書、訳書を次々と発表。

II. 坪井玄道の米国訪問

坪井が体操研究の為、明治34年(1901)2月に欧米に向かって日本を旅立ち、翌明治35年(1902)6月に帰国するまでの間の詳しい留学行程は、日本国内に所蔵されている坪井玄道関係資料「書簡の部」及び米国で発見されたボストンのジャーナルの両者を整理・分析することによって、凡そ表2に示した様に、彼の欧米における滞在行程を跡づけることができる。そしてこの旅の締め括りとして、同年5月初めに、米国ボストンに立ち寄ることになる。

表2 書簡にみる坪井玄道欧米留学行程²⁾

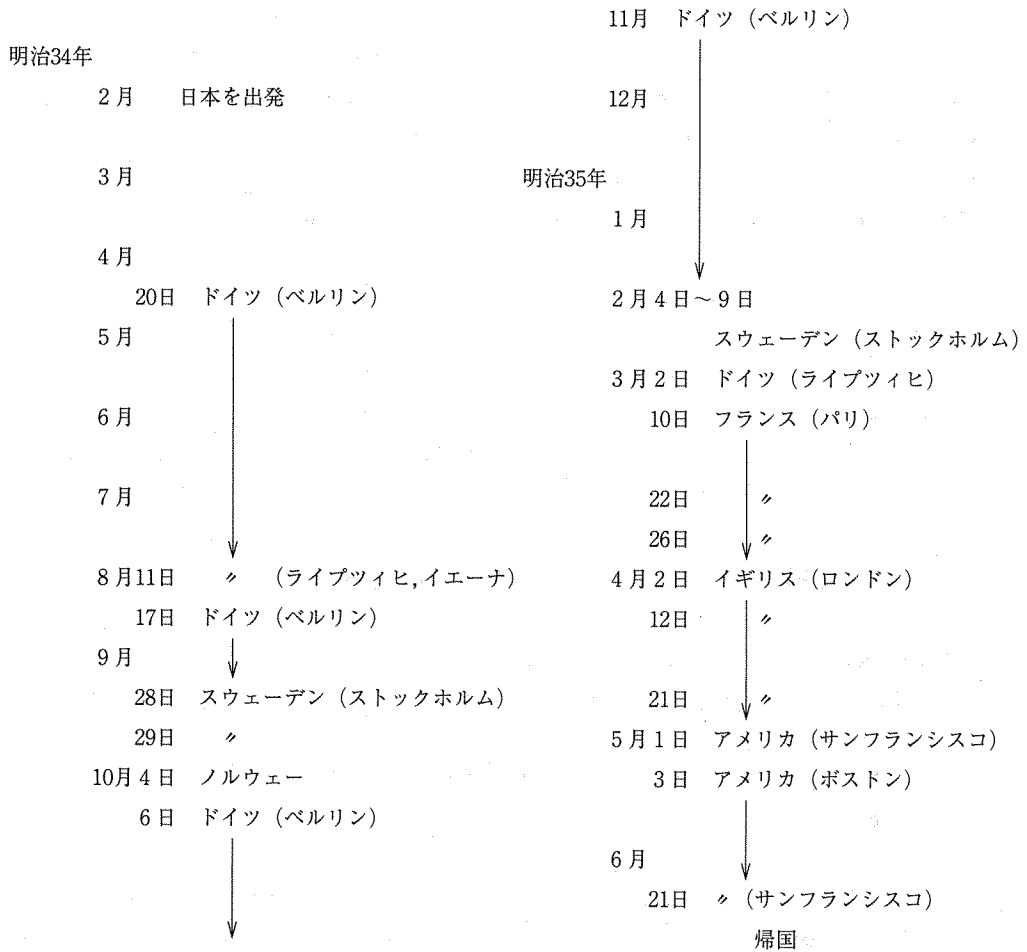


図2 ベルリンにて (前列左から坪井玄道, Marie von Lagerström, 後列左から吉武栄ノ進, 小泉又一, 蜂谷貞興らと) 明治34年9月

1. 訪米の目的

この時期における坪井の米国訪問には、いかなる目的があったのであろうか。この辺りの事情に関して最も詳しい『ボストン・グローブ』紙は、「坪井玄道氏がボストンに来たのは、旧跡や美しい風景、街の建物を訪れるためでも、たくさんの教団やこの地域特有の「学説」を学ぶためでもありません。傑出した日本人である坪井教授の目的は、東京、次いでは日本全土で指導するシステム化された体育教育に採用できる体育の方法をボストンから学ぶことです。」と述べている。(傍線：筆者) 坪井が訪れた当時のアメリカ体育界の動きを概観すると、凡そ次の様である。

19世紀後半のアメリカ体育界の動向―体操体系の系譜³⁾

1. 初期のドイツ体操の系譜 (C. ベック, C. フォーレン, F. リーバー, C.E.ピーチャー, D. ルイス)

国民個々人の能力を増進させると同時に、平時、戦時の別なく非常事態に十分に応じることができるようによく訓練された市民を国家に提供しようとすることを目的としていた。学校におけるカリキュラムの一部としての身体運動は、運動それ自体のためでも、体操家養成のためでもなく、生徒自身の身体を健康で、強く、機敏にさせるために修めるべきものであって、これを病気を治療したり、軽い疾患や不具合を治す一般的な処方としては捉えていなかった。

2. 南北戦争後のドイツ体操の系譜

基本的には、ヨーロッパで実施されていたものと同様。特に数種類の器具を使う体操とクラス全体や個々の生徒を対象とするゲーム、徒手体操又は軽体操を（音楽にあわせて実施）行っていた。ドイツ人は、多くの体操の性格を含むゲームを通して、体育に重要な貢献をしている。

3. スウェーデン体操の系譜 (H. ニッセン, B.N. ポッセ, E.H. ハートウエル)

この体操をアメリカの学校に伝えた最初の一人であるポッセは、体育は単に健康だけでなく技術の獲得、即ち抑制、印象、表現を正しく行うための注意力の教育に役だっている。…正常な活動にある自然さを助長し、異常な方向への発展を妨げるためにいろいろな運動が選ばれた。体操運動の価値は、身体に及ぼしたその効果とそれを行う際の簡潔さと美しさが決定すると述べている。器械体操よりも徒手体操に重点を置いた。ここでは、逆に音楽は心を乱すものとして非難された。

4. アメリカ体操の系譜 (E. ヒッチコック, D.A. サージェント, R.J. ロバーツ※L.H. ギューリック※, J.H. マッカーディ※) ※YMCAの体系もここに含めて分類した。

また合い前後して、坪井のボストン滞在を報じた『ボストン・サンデーポスト』紙によれば、「坪井教授は文部省の指示により、身体発育のための最良の教育法を捜し求める世界歴訪の旅に出るために、去る2月東京を立ちました。教授はこれまでにベルリン、パリ、ストックホルム、オスロ、コペンハーゲン、ライプツィヒ、ミュンヘン、テューリッヒ、ロンドンを訪問しました。」と前置きをしながら、今回の訪問を「日本は、他の分野同様、国民の健康全般の基礎としてのみならず、国民の知的発育並びに道徳的発育の基礎として、体育の重要性を深く認識しています。この事実は、東京で男女師範学校における高等教育に関し、教鞭を執っている坪井教授が我が街（ボストン：筆者注）を訪れていることから明らかです。」（以下：同断）

以上の様に、両紙とも今回の訪問のねらいを、わが国の体育の近代化に資する優れた教育法を学ぶことであると明確に規定している。

2. 訪問日程及び場所

ボストンでは、まず最初に、Y.M.C.A. 体育館にロバーツ教授*を訪問している。この模様は、「昨日（5月7日：筆者注）、坪井教授はボストン Y.M.C.A. 体育館でロバーツ教授と一緒に数時間を過ごしました。ロバーツ教授は、今までに良好な成績を取め、おそらく全国数百もの同じ様な体育館で実践されている独自の（ロバーツ）システムを実践しました。…

（中略）…Y.M.C.A. で長年医学長を務めたリーランド博士は、ロバーツ教授のシステムに傾倒しており、坪井教授も本市滞在中に大きな関心を寄せることでしょう。」と述べ、今回の訪問の中で、坪井自身がとりわけこの場所を訪れることに深い関心を示していたことを窺わせている。

*ロバーツ（Robert J. Roberts）：YMCAの最初の体育教師，“体操は安全で偏せず、容易で簡潔であり、満足感を与えるもので、しかも有益でなければならぬ”と信じていた。事実、YMCAの初期の体育計画は、亜鈴、軽器械を用いての活発、敏捷なカリセニクスと、重器械体操、ランニング、スポーツなどを組み合わせて、均衡が取れるように努めていた。YMCAが独自で体育指導者の養成を始めてからの体育課程は、スポーツや競技、水上競技、レクリエーション活動と共に、コンディショニングを目的とするカリセニクスや体操を行う様になった。また、職員によるバスケットボールやバレーボールの考案はスポーツに対する関心を示した結果の産物であった。

1887年 YMCA トレーニングスクール（スプリングフィールド、シカゴは1890年）体育部増設→後のスプリングフィールド・カレッジ：ロバーツ、ギューリック、マカーディらは体育計画の創案と発展に関わる、ジョージ・ウィリアムズ・カレッジ

他に市立屋外体育館、ハーバード大学にサージェント博士**、並びに同大学フィッツジェラルド教授を訪れ、特に彼とは一緒に市内の多数の公立及び私立学校の訪問を予定していた。

**サージェント（Dudley Sargent）：1879年 ハーバード大学の助教授となり、新しく出来たヘミンウェー体育館長を兼務する。以来40年間、体育の多くの面（教員養成、競技、カリキュラム、テスト、測定、体育館及びその施設等）に渡って深い影響を齎した。

1887年 ハーバード大学夏期講座開講（期間は、5週間、以後毎年開催、57名の男女参加）

1889年 ボストンで“身体鍛練のための会議”開催

1891年 サージェント、フィッツ（ジェラルド）ハーバード大学ローレンス理学部内解剖学・生理学・体育学科設置（2～3年後閉鎖）

1897年 全国大学体育協会創設（旧名称は、カレッジ体育館長協会）

これ以外には、ニューヨーク市やシカゴ等を訪れ、最終的には、6月12日頃サンフランシスコを経由して帰国をする計画を携えていた。

尚、この機会に坪井がリーランドに直接会ったか否かという事実⁴⁾に関しては、判然としない。アメリカに帰国してからのリーランドの活動については、以下の様である。

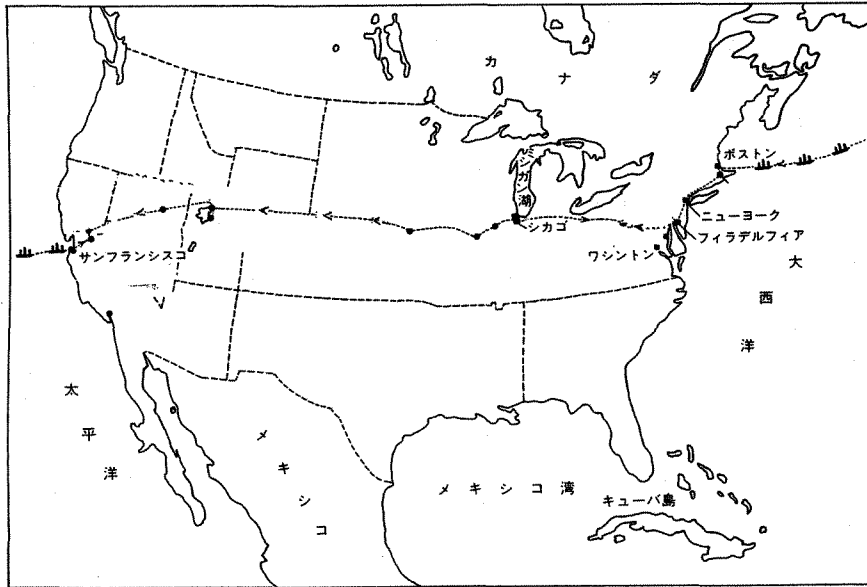


図3 アメリカにおける坪井玄道の行程

- 1893年（明治26）43歳 妻子同伴渡欧，ベルリンに数ヵ月滞在，
この年，ダートマス医学校（Dartmouth College Hanover, New Hampshire）
咽喉科教授となる。1913年まで20年間続く。
- 1894年（明治27）44歳 米国耳科学会会員となる。
- 1902年（明治35）52歳 米国咽喉学会副会長となる。

Ⅲ. ボストンのジャーナルに掲載された「坪井玄道」

すでに取り上げた様に，遠来の賓客である坪井玄道の訪問を詳しく掲載したボストンの地元紙に以下の二紙があった。

『ボストン・グローブ』（1902年5月8日付）⁵⁾

「体育研究」—坪井玄道教授，日本における体育の最良の教育法を捜し求めて

『ボストン・サンデーポスト』（1902年5月11日付）⁶⁾

「坪井玄道教授」—日本における体育

各紙は，それぞれ関心を引くタイトルを付し，この日本からの教育者を手厚く歓迎した。以下に，これらのジャーナルに実際に掲載された坪井玄道教授の紹介，日本におけるアマースト方式導入の経緯，日本体育の現状について（体育に対する考え方及び姿勢，日本女性に関心のあるもの，日米の女性の相違）など，その内容に即して検討していく。

尚，『ボストン・サンデーポスト』の記事は，著者アーサー T. バスウェル（医学博士，所属は不詳：筆者注）と記されており，彼が取材及びインタビューするかたちでまとめられていることがわかる。

「スポーツマンであり、立派な肉体の持ち主である坪井教授は、理論と共に実践も重んじています。訪問先では、調査中の様々なトレーニングにも、自ら参加しています。」

「筆者（前出：アーサー T. バスウェル）の目から見ると、坪井教授は Y.M.C.A. 体育館でロバーツ教授の指示のもと授業に取り組む現代のヘラクレスの様です。しかし、ロバーツ教授が坪井教授を紹介するために前に出るように促すと、彼はむしろ進んで肩の力を抜きました。坪井教授は出身国の日本国民同様、比較的背が低いにもかかわらず体格が良く鍛え抜かれ、アメリカ男性に共通の温存体力や耐久力の持ち主といった印象を、人々に与えます。良く知られている日本人の礼儀作法に従い、非常に礼儀正しくお辞儀をしながら、坪井教授は日本語の普通体操法の改訂版一部を下さいました。教科書のタイトルの英訳は、“Text Book for Normal and Middle Schools on Improved Gymnastics ”です。（明治31年2月26日文部省発行『訂正増補普通体操法』、中学校及び師範学校教科用書、をさす。：筆者注）

この教科書は、基礎的で無理ない体操、深呼吸法、ダンベル、アーチェリーの的板、インディアンクラブ、吊り輪、お手玉（主に女子に指導）及び科学的な測定方法に関する理論と実技について述べています。」（本書には、付録として、文部省医学監督新井春次郎博士による人体運動機



図6 ポストン紙に掲載された坪井玄道

訂正増補 普通体操法		師範学校教科用書
目次		文部省
第一 體操準備	第十二 同	
第二 整容法	第十三 同	第二演習
第三 呼吸運動	第十四 木球體操	
第四 身體矯正術	第十五 豆莢體操	
第五 徒手體操第一演習	第十六 體操演習示要	
第六 同 第二演習	第十七 身體検査	
第七 哑鈴體操第一演習	附録 人體運動機略論	
第八 同 第二演習		
第九 同 アンツイル、コーラス演習		
第十 球字體操		
第十一 選擇體操第一演習		

一人體運動機略論及各運動ヲ營ム筋肉ノ明説トハ、新井春次郎君ノ編撰ニ係リ、身體検査ニ關スル條項ハ、三島通良君ノ編撰ニ係リ、呼吸運動ノ編撰ニ至リテハ、星野平野兩令嬢ノ大ニ助力セラレタルモノナルヲ以テ、特ニ此ノ所ニ記載シテ其功勞ヲ誌ス、

明治三十一年一月

図7 『訂正増補 普通体操法』（明治31年2月26日 文部省発行） 坪井玄道，田中盛業編

略が添付されている。：筆者注）

以上の様に、彼の日本での最近の業績も含めて分かり易く人物紹介を行っている。

2. 日本におけるアマースト方式導入の経緯

アメリカからリーランドを招き日本体育の近代化に着手するプロセスは、これまでの先行研究で数多く取り上げられてきた。例えば、1888年アマースト卒業生ポール・C・フィリップスの『アマースト同窓会季刊紙』寄稿の文章や「シーリー関係文書」（アマースト大学所蔵）⁸⁾等です。すでに明らかであるが、ここで述べられている多くの部分がこうした情報源を参考にして記述したと見做される類似した箇所を数多く含んでいることが指摘されよう。

以下にその箇所を引用する。

わが国における体育が、1876年から1877年にかけて文部大輔田中不二麿の同じようなアメリカ訪問から端を発している事実は、誠に興味深いことである。不思議に思えるかもしれないが、この著名な人物は、世界各国訪問後、長期に渡って調査した全ての教育方法の中でも、地味で規模の小さいアマースト大学が優れたものであるとの報告をしている。この結果、アマースト教育法を日本の学校に紹介することに関して、文部省とアマースト大学当局の間で書簡のやり取りが始まり、G.A. リーランド博士が選ばれて日本にアマースト教育法を教えに行った。リーランド博士は、ボストン市立病院での任期が終わるところであった。さらに博士は、以前にアマースト大学の準備コースを受講していたので、当大学での教育法に精通していた。その後3年間リーランド博士は、総括監督者伊沢修二のもと任務に従事した。この間、著名なニューヨークの教育者ディビット・マレー博士も日本に滞在中で、日本の師範教育の指揮を担当していた。

次にリーランド博士は書簡の中で、文部大臣が当時既知の他の全ての教育法を差し置いて、採用を決定したアマースト体育教育法の特徴について、以下の様に述べている。

それは軽い柔軟体操で構成され、指導は各クラスごとに行い、全ての学生が参加を義務づけられるものである。この結果、アマースト大学は同大学の学生の健康のために、システム化した訓練を採用した最初の大学として、当時、体育教育における名声を与えられた。

リーランド博士によると、日本の文部大臣が目を見張ったことは、身も心も没頭させながら、音楽に合わせ、とても楽しく体を動かす体操に、皆が参加しに来たということである。

続いて地道な実践を積み重ねてきたアマースト方式の成果に触れて、1872年にリーランド博士は、大学10チームが参加したスプリングフィールドのコネティカット川ボートレースで見せたアマースト体育教育法の素晴らしさについて以下の様に述べた。

全てのチームの中で、アマーストの男子学生達は、全般的に最高の成長を見せてレースに優勝し、システム化した体育教育の勝利を宣言した。

続いて、このアマースト方式を導入することになった動機とその後の発展ぶりについて、以下の様に要約した。

1869年以前は、他の大学同様アマースト大学も徹底的な体育教育に対してほとんど関心を示していなかった。確かに鉄棒、クロッケーや輪投げはしていたが、どれもたまたに遊んだり娯楽でするもので、指導者達が夢見ていた科学的体育の実施といったものではなかった。そこで、厳しい眼で、徐々に低レベル化していく一部の学生達に気付き、全体的な科学的体育教育を通じて、将来的な健康や精神力の基礎を築くという考えを産み出したのが、敬うべきスターン博士（第4代学長：筆者注）であった。

1858年、一人の将来有望な学生が死亡した。博士は、この学生の死は知識だけに偏った教育のせいだと考えた。先見の明があるこの教育者は、大学の理事達を説得して体育学科を創設した。アマースト大学は、大学課程に体育教育を設置した最初の大学として、アメリカの学校の先駆者となった。

この小さな始まりが、世界的な体育に対する需要に発展していった。

その需要は、大学や短期大学のみならず公立や私立の一般の学校にも広く普及していった。

最後に、身体的発育が道徳的性質に及ぼす影響について言及し、アマースト方式の特性について次の様に強調した。

通常の身体的発育が青年に道徳的性質にどの様に關係するのかについては、すぐに結果がみられるものではありません。しかし少年期に、努力しなければならぬ素質を得ようと求めた人が、青年期に成功するのです。この内に秘めた行動力—あえて言うなら、根性、勇気、活力、度胸、決心—が肉体的に鍛えられた人間を形成し、大抵その様な人間は、自信を生みだし何処に行っても自らの道を勝ち取る純粋で強靱な性格、そして美点を兼ね備えているものです。バットやオールの陰に隠れている少年達に必要なことは、筋肉と同時に勇気を養うことです。そして賢明な体育教育を実施している教育者達は、単に受け持ちの生徒達の知性と体力を鍛えるだけでなく、彼等の人格も養っているのです。

3. 日本体育の現状について

1) 体育に対する基本的な考え方及び姿勢

日本の学校教育の一環として義務づけられている体育の利点について、以下の様に述べた。

一般に学校の教室での体育は、子供たちにはたいてい嫌がられる存在にある。またこれを内容的にみても極めて機械的な遊びに過ぎない傾向が強くみられ、一方教師たちの厳格な監視のもと本来の目的から逸れている現状にある。しかし例えこの様な実情にあっても、心と体の手作りの教養こそが、学校を卒業してからも、生徒に末長く体育の習慣を続けさせることに直接つながっていくものである。

実際にわが国で体育教育が開始されて以来、全体として国民の健康保持と長寿をもたらすことに大いに貢献してきたが、概して日本の下層階級は、怠惰で裕福な階級よりも体が丈夫で健康である。その様な傾向が見られるにもかかわらずこの裕福な階層は大学を卒業してしまうと、学校での体育のことに段々無関心になり、食事と睡眠の時以外は、凧上げをしたり、将棋大会に出たりして過ごしているのが現状である。

以上のことから肝案すると真に体育を必要としているのは、これらの裕福な階層であるといえ

る。

2) 日本女性に関心のあるもの

次に今日、わが国の若い女性達に流行しているスポーツについて言及し、その効用について逆にアメリカ側に指摘をしている箇所がある。

現在の日本の若い少女達に人気があり、全身の健康をもたらす競技がバドミントン（英国式羽根つき）です。ほとんどのアメリカの子供達は、このゲームのことを全く聞いたことがないのですが、非常に爽快で健康的なゲームの一つであることは確かです。もしこのゲームが、アメリカの子供達の間で人気が出たら、日本同様、全アメリカ国民の人気を得ることでしょう。

3) 日米の女性の相違（体育、習慣、衣服、寿命）

ここでは、日米の女性の体育、習慣、衣服、寿命などの違いについて、その特徴を端的に述べている箇所である。

- ①日本の女性の体育について触れた箇所では、（一般的な傾向として）私たちは、楽しいことや、幸福感とか健康を与えてくれるものを熱心に続ける。日本の女の子は、何時間も続けて遊ぶが、これは同時に最良の体育でもある。一方米国の女性の場合は、彼女たちの運動といえば、馬車乗りあるいは、常時監視の目に晒された中での控えめの散歩といった様なものが一般的である。
- ②日米の習慣の違いについては、日本の少女は、自分の部屋や庭で、鳥や菊、蓮の花の香りに囲まれ、幼少の頃は女中の世話になりながら、自らを鍛えていかなければならない。一方米国の場合は、人々は教養クラブや利益的なクラブの会合のために室内に集まるといった習慣は持ち合わせていない。
- ③衣服に関しては、日本の若い女性は、自由で自然な生活環境の元、ゆったりとした着物を着ている。これとは対照的に米国の普通の若い女性は、コルセットを身に付けたり、ウエストを締め付けている。おしゃれな装いではあるが、健康面を無視したものである。

最後に最も興味を引く問題として、女性の寿命の長さを指摘している。

- ④日本の女性は、男性よりも長生きをする。見たところ華奢な体つきなのに、一般的に健康で長生きをし多くの女性が90歳、100歳まで生きる。（各国勢調査で、80歳を超えた国民全てに、天皇陛下が美しい「サコ」（杯）を贈る風習がある。この年令に達する男性はわずかであるが、多くの女性は皆が羨むその贈り物を受け取りにやって来る。）理由として彼女たちの習慣、衣服、そして野外での自由な時間を謳歌している為と考えられる。尚、ここでは米国の女性の事例に関しては、一切触れられていない。

当時の日米の文化、生活、習慣などの違いが容易に比較対照できて実に興味深い指摘を行っている。

IV. 留学報告—日本近代体育の更なるアイデアを求める旅の総括

坪井玄道は、1年4ヵ月に渡る欧米留学を通して、『ボストン・グローブ』に以下の様な旅を総括する一文を寄せている。

（世界各国で実施されている：筆者補足）システム（体操体系）は、様々である。しかし、ドイ

ツ⁹⁾、スウェーデン⁹⁾、アメリカ¹⁰⁾のシステムの間には抜本的な違いは見られない。これらのシステムは多かれ少なかれ適合している。日本では、学校の各学年に関係する多くの体育館に幾つかの体操器具があるが、我々はその器具だけにとらわれていない。

日本には屋外体育館がある。特に東京付近は温暖で、気候も大抵年中穏やかで、若者の関心を大いに引いている。

わが国には、アメリカ人のいう競技 (Competitive Sports) がほとんど行われていない。

過去20年間に、体育の現場は大きく広がっていった。

今後、ニューヨーク、シカゴ、サンフランシスコを訪れ、更にわが国システムの役に立つものを収集する予定である。帰国後は、現在採用している教育法よりも優れていると私が考える先進の新しい方法を、多くの教師集団に教えるつもりである。

この箇所ですべて重要な指摘を行っていた。

一つは、現在、欧米で実施されている体操（主としてドイツ、スウェーデン、アメリカ）は、どれを探っても大きな違いが見られないとの判断を下したこと¹¹⁾。二つ目には、わが国に体育が導入されて以来この方、スポーツの実施がほとんど見られなかった点を鋭く突いたことである。そのため一番身近にあったリーランドが伝えたアマーフト方式の継承・発展を計ると同時に、一方ではその不備な点を克服しようと常に努力を怠らなかつたことである。

結果、彼が後年体育を通じて目標（目指した）とした「体操遊戯併用」¹²⁾論に結実していったと考えられる。こうした意識の芽生えは、まさにこの時期を契機に形成されていったものと看做される。

最後に、

「どこも、私を暖かく迎かえ入れて下さいました。その中で私が調査して特に感銘を受けたのは、スウェーデン、ドイツ¹³⁾（「ドイツ人は最も多く体操器具を使っています。しかしながら、特に学校ではバランスや行進、ダンスの時の姿勢に非常に高い関心を寄せています。どの学校も体操に多くの時間を割いています。」）（ボストン・グローブ）、そしてここボストンです。」と最も印象に深く残った三つの都市を挙げて、文章を締めくくっている。

V. おわりに

坪井玄道は、欧米各国の体育研究を行ったが、とりわけ関心の深かつた米国体育については、わが国にもたらされた体育のルーツを自分の目でしっかりと確かめることと同時に体育導入以来20有余年を経て一段と進歩・発展した米国の体育教授法に学ぶことが主眼であった。

『ボストン・グローブ』紙は、「体育は以前、高学年の授業にだけ採用されていましたが、今では低学年でも取り入れています。日本人の服装、特に女性の服装は、他のシステムの幾つかを実行不可能にしています。坪井教授はまだ、自国に取り入れられるものを数多く見つけるつもりです。…（略）…教授は長い旅の間で見て来たものを全て、メモにぎっしり取って来ました。更に、興味を持ったテーマに関する文献を収集して来ました。」とこの辺りの事情について更に詳しく述べている。

これまで見てきた様に、坪井玄道が欧州留学をほぼ終えて立ち寄ったボストンで洩らした感想は、彼が後年わが国の体育界で活動を成していく際の中核をなす根本理念を示唆していたといえる。

他のシステムについても千思万考の末に、尚、一途にアメリカに深い関心を示し、進歩した教育法をわが国に導入するために尽力した。

こうした起動力を呼び起こす契機となったのが、まさにこの時期の欧州留学・米国視察の体験を通してであったといえよう。その意味では、坪井の視野と探究心を大いに広げた旅であった。

坪井のヨーロッパ諸国における体育研究及び米国ボストン以外の諸都市を巡る視察の詳細については、今回取り上げることができなかった。今後の課題としたい。

〈注〉

- 1) 「坪井玄道関係資料」, 1.A 辞令, 明治33年6月12日
- 2) 「坪井玄道関係資料」, 8.H 書簡（1～10）, 書簡中, No. 1～No. 309について年月日, 表題, 差出人, 受取人, 形態を手がかりに, 坪井の留学中の滞在先を跡づけた。尚, 滞在地は, あくまでも書簡に基づき発信地及び受信地により確定した。
- 3) D.B. ヴァンダーレン・B.L. ベネット共著, 加藤橘夫訳『体育の世界史』, p383～p417（前掲箇所を参考に, 19世紀後半のアメリカ体育界の動向を筆者が概観した。），1976年7月, ベースボール・マガジン社
- 4) 国民教育奨励会編纂『教育五十年史』, 第二章 創業時代の師範教育体操伝習所の設置 坪井玄道, p18～p23, 民友社, 1922年10月
リーランド氏帰国の箇所で, 「リーランド氏は其後独逸に三年留学, 米国に帰てから耳鼻咽喉科の開業医となった。私が前に米国へ行った時別れてから21年目で遭って大層世話になった。今でも達者で居るさうだが, 其時から数へて今年が又其二十一年目に当るのも何かの因縁であろう。(完)」と述べている。この記述から推測すると, 米国視察の途上で, この二人は直接出会ったことになる。
- 5) Amherst College 「リーランド関係資料」, 3) Clippings—Boston Globe, May 8, 1902
- 6) Amherst College 「ク ク」, 3) Clippings—Boston Sunday Post, May 11, 1902
- 7) 坪井玄道・田中盛業編『訂正増補 普通体操法』, 明治31年2月26日, 文部省発行, 巻末の記述によれば, 明治20年7月8日 著作権所有届 文部省, 同31年2月21日 訂正増補 文部省検閲済, 同年2月23日 訂正増補印刷, 同年2月26日 再版発行（発行兼印刷者 大日本図書株式会社）となっている。
- 8) 拙稿「リーランド招聘に関する経緯」—アーマースト大学所蔵文書の分析を中心として, 北海道大学教育学部紀要, 第73号, 1997年, ここですでに指摘した様に,
(i) 1878年3月6日付書簡 体育教師の招聘（体育教師選任依頼）
(ii) 1878年8月15日付書簡 1878年6月3日付書簡 体育教師選任に関する書簡, 体育教師選任に関する御礼, リーランド博士に寄せる期待, 契約に関する進捗状況
(iii) 1879年4月10日付書簡 リーランド博士赴任後の活動報告, わが国体育教育の実情報告, リーランド博士選任に関する御礼, （今村嘉雄『学校体育の父 リーランド博士』資料12 田中不二麿書状—シーリー宛 同書では, 1879年4月10日付書簡のみが取り上げられているに過ぎない。）
これらの書簡によって, 詳しい事情を伺い知ることが可能である。
- 9) 「山陰之教育」, 明治35年3月, 鳥取県立図書館所蔵
坪井によるドイツ体育視察によれば, 「男女の体操 伯林に於ける体操の模様をみるに中学校小学校私立の学校を問わず共に中々盛に行われ, 日本では主に男子のみに課せられあれども此所では女子に行われつつあり。其程度は行進運動, 器械体操にして器械体操は鉄棒の懸上がり, 振上懸垂, 木馬の閉脚跳開脚跳等簡易のものを用ひたり。されど男子の体操に就いては日本と較べて格段斬新なる事なけれ。」
同様にスウェーデンの事情についても触れて, 「ストックホルムは伯林よりも一層体操の奨励さるる土

地にて学校に於ける教授の方法及体操の種類などは別に伯林と異なる所なし…(略)…時に偶々小学校生徒の合併運動会ありて王国体操学会長の紹介にて運動会を来觀せしが男女の生徒の運動方法は別段目新しく思はる点を発見せざりし。…単に体操といへば壯年者のみに限られ併も強壯なる者に行はる感あれども此所にては老人に体操をなさしむる方法あり。」と当時の体育事情を述べている。

- 10) 藤村とよ『学校体育論』(学校体育文庫 第二卷), 1930年3月12日, 一成社, p58,

坪井玄道の弟子で、彼の可兒徳が洋行し帰朝後の話しに拠っても、「我が国の坪井氏時代の体育は決して世界の進歩に遅れたものでなく、アメリカに於いては未だそれらの形成が盛んに行われていたということ報告されたことがあった。」と当時を振り返って述懐をしている箇所がある。(傍点：筆者)

- 11) 前掲書, p22~p23,

坪井は、当時欧米で実施されていた体育を凡そ以下の様に受け止めていたと考えられる。

「坪井玄道氏が世界漫遊中、既に其他国に於いてはスウェーデン万能視しているにも拘わらず、ドイツではスウェーデン崇拜者もあつたが、又反対者多く、余り万能視していなかつた。尚研究中であつたと言われていた。即ちドイツはいよいよ真理と認めたならば、他国のものでも自国のもの同様に取り入れる代りに、決して自己の中心を覆へてまで不合理に流行を追わないということは確実である。

今日ドイツではスウェーデン式を全然採用しなかつたとは言っていない、然しその長所を採つてその短所を採らなかつたということは明らかであるのみならず、その長所を自国に同化しそれを採用し、スウェーデン式として丸のみに採用しなかつたと云っている。

今日如何なる国に於いてもスウェーデン式の器械のない国はないに反してドイツにては、僅に肋木がある他にはスウェーデンの器械は用いていないのによつても明らかである。」(以下：同断)

- 12) 鶴沢久美子『中世以降の市川』, 五. 郷土と人, p54~p63, 1982年10月

「確かに、彼が体育界に身を置くようになったのは、リーランドの通訳を勤めると一つのきっかけからに過ぎなかつた。しかし、その後の彼の行動は、一貫して「体操遊戯併用」という体育論を掲げ、得意とする語学力を生かして、欧米スポーツの中から日本にあつたスポーツを選んで紹介、普及に努め、当時の体操の戶外遊戯不足を正に努力している。」

同様に、体操遊戯併用論に言及した論考は、他にも例が見られる。木下秀明「近代日本の体育思想3 坪井玄道」, p351~p355, 体育の科学, 1964年6月 ここでは、「坪井は、身体活動による心身の教育という意味での体育観にたち、健康を目的に合理的に構成された普通体操と人間性の発展に資する戶外遊戯を併用する方法論を提唱した」、(この時期における) 近代的な体操遊戯併用論の提唱者(筋の通つた体育思想家)として彼の存在を高く評価している。

- 13) 「京都府教育会雑誌」, 149号, 明治37年9月, p10

明治37年8月、坪井は欧米留学から帰国後、「体操」と題して京都府に於いて以下の様な講演を行った。「欧米の先進国へ行ったら嚙かし新しい体操や珍しい運動が沢山あつて恰も宝の山へ入つた様に掘み取り取り取りであろうと思つて行きました。所が案外さうでない。一向つまらぬことが多い。…段々見て歩く内に追々感心すべき点が見い出された。能く能く調査して見ると…感服すること許りであつた。独逸には一番永く滞在しましたが、其学校でやる体操は生徒の身体の爲めと云うのが目的であるから、技術は極容易なものを選んで而して必ず生徒自身にやらせる様にして居る。…日本の学校で、器械体操をやらせる所を見ると、大変に難しいことをやらせるから、生徒一人では中々出来ない。…生徒がやつて居るのか先生がやつて居るのか、殆どわからぬ様な次第である。独逸では容易なものを選んで、其上足の運動や手の運動や身体の運動や色々な種類を取り換え入れ換へて飽かぬ様にやらせて居る。日本でやる所を見ると学校の時間割にあるからやらせると云う様な有様で…それでは何の役にもたつたぬ。私は独逸流に容易な事を飽

かぬ様にやらせたいと思ふ。生徒の飽かぬ様に色々の種類をやらせると云うことは、初め随分と困難なことであるが熟練して来ると訳なく出来る様になる。

それで体操を教えようとなさる方々は、先ず第一其授業に就いて考へられたい。…遊戯は只生徒を悦ばせるのが主意でないから、彼の表情遊戯とか云って手先許り動かすのは何の益にもたためから是非共動体遊戯をやる様にしたい。

瑞典。体育では世界第一だと誇っている丈けあって、それは盛大なもので独逸などの比でない。…而して体操教師は、大変に厚遇されている。尤も体操教師には医学士も沢山いる。各学校は競うて医学士の体操教師を庸うている。」（傍点：筆者）

と述べ、坪井が欧州留学中に感銘を受けた体育に関する指導法及び基本的な考え方、体育教師の位置づけなどについて特に強調している箇所が見い出せる。